

【優秀賞】愛媛 FC 賞

「先生が彼をしかった理由」

西条市立東予東中学校 2年 高橋 晴香

「男なのにピンクとかやば。」

私が小学一年生の頃の冬の教室で、ピンクの手袋を持っていた友達に対し、そう言った一人の友達があった。その友達は、あとで先生にしかられていたが、当時小学一年生の私には、どうして彼がしかられていたのかなんてよく分からなかった。しかし、今になってようやく私はその理由が分かった気がするのだ。

それにしても、どうして私は六年以上前のこのちょっとした出来事を、こんなにも鮮明に覚えているのだろうか。別に彼がしかられるのはよくあることだったし、先生が大きな声で怒鳴っていたというわけでもない。それなのになぜか、私の記憶にしっかりと焼きついているのだ。理由を考えてみると、私はそのとき、幼いながらに彼の言葉に「違和感」を感じていたからなのかもしれない。

もし、あのときピンクの手袋を持っていたのが私だったら、彼は私に「女なのにピンクとかやば。」と言っただろうか。きっと言わなかっただろう。あのとき彼がそう言ったのは、彼の心に「ピンクは女子が好きな色だから、男子がピンクを好きなんておかしい。」という考えがあったからだろう。私もピンクは好きだが、それは「女だから」という性別が関係しているわけではない。ただこの色を「いいな」と思うから好きなだけである。

私は、人間の心は「いいな」の連続でできていると思う。好きな色、好きなもの、好きなこと、好きな人、やりたいこと、これらはすべて自分が「いいな」と思うことだ。自分が決めることであって、他人に決められたり左右されたりすることではない。ましてや他人が誰かの「いいな」を否定するなんておかしいこと、とんでもないことだ。そう考えると、あのとき私が彼の言葉に感じた「違和感」

というのは、「他人が誰かの『いいな』を否定するなんておかしいことだから、そんなことしたらいけない。」ということだったのだろう。

私の思う「いいな」を言い換えると、「個性」に近いだろうか。「個性を大切に」という言葉は、皆さんも多くの人に口酸っぱく言われてきたことだろう。私は、すべてはこの「個性を大切にしていけばいい」ということにつながるのだと思う。

今、社会では「多様性社会」を目指して様々な取組を行っているようだが、それでもまだ「個性」の違いで生きづらさを感じている人はたくさんいる。では、みんなが生きやすい社会を実現させるにはどうすればいいのだろうか。

前述のとおり、人には「いいな」と思うことがあり、それは人それぞれ違う。このことを誰かに否定されることが、生きづらさの根源であると考えている。裏を返せば、人それぞれの「いいな」をお互いに認め合えば、生きやすい社会を実現できるはずだ。

私たちはつい、自分の「いいな」を他人に押し付けてしまいそうになることがある。もしそうなったときにはぐっと堪え、「そんな『いいな』もあるんだね。」とそれぞれの「いいな」を認め合いたい。「個性を大切にする」とは、そういうことなのだと思う。

あのとき彼をしかった先生は、私たちにこのことをきっと伝えたかったに違いない。